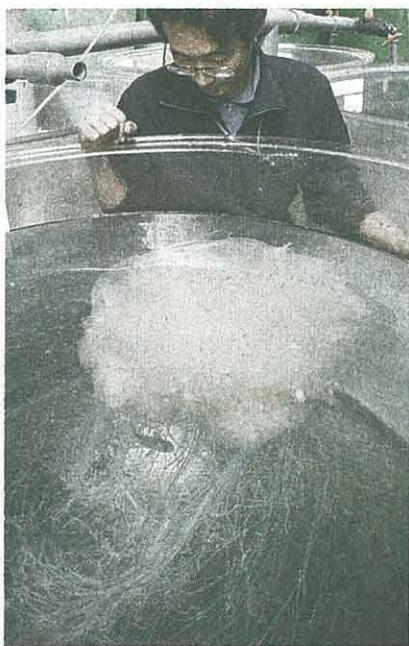


# ユウレイクラゲ



## 久保田 信

4



田辺湾で捕獲された大型のユウレイクラゲ(2007年10月)

おどろおどろしい和名を持つユウレイクラゲは、傘径が数十センチにも達する大型の鉢クラゲ類である。全体が乳白色で髪をふり乱したような多数の長い触手が特徴である。傘には16の小さな切れ込みがあり、その間に8個の感覚

器が規則的に配置されている。口側から見ると、複雑に折り畳まれた柔らかなフリル状で乳白色の口腕(こうわん)がある。その色とともに、ざんばら髪が幽霊のように見えたのだらう。日本では奇妙な和名で呼ばれるが、海外の近縁種には「ライオンのタテカミ」という勇ましい名前が付いており、所変われば印象がまったく異なる。

田辺湾では冬季に田辺湾口の海岸べりに漂着することが多いが、その頻度は少ない。田辺湾に出現するクラゲのカレンダーで最古の記録は、1950年代、京都大学瀬戸臨

海実験所(白浜町)の職員をされたこともあるプランクトン学者として著名な山路勇博士による。それを見ても同じ出現状況である。私が紀南に来て初めて遭遇したのは94年9月初旬だった。2000年の夏から秋にも5個体と遭遇するなどの記録もある。

ユウレイクラゲは瀬戸内海で夏季に多産する。松山市の浜辺で青年時代までを過ごした私も、海水浴シーズンに悠然と海中を浮遊する白いユウレイクラゲを見て不思議に思った記憶がよみがえる。その和名とは裏腹に、ユウレイクラゲの刺胞毒はそれほど強くなく、ひどい痛手を負うことはまずない。瀬戸内や紀伊水道ではウマヅラハギを釣る餌として珍重され「ハゲトベ」や「マエデ」などの地方名で呼ばれる。漂流物にくっついて一生を過ごす甲殻類のエボシガイの仲間、クラゲエボシが、傘にしっかり取り付いて一緒に旅をしていることがたまにある。(京都大学准教授)